

台湾新文学運動と厨川白村

——北京からやって来た「大正生命主義」——

工 藤 貴 正

はじめに

一 厨川白村と「大正生命主義」

- (1) 「大正生命主義」の典型としての厨川白村著作
- (2) 「個人」の創造的「生命力」を重視する「大正生命主義」の精神
—魯迅『狂人日記』(1918)と厨川白村の創作『狂犬』(1915)
- (3) 昭和における「大正生命主義」の変容と厨川白村の退場

二 台湾新文学運動と厨川白村

- (1) 台湾新文学運動抬頭期到北京から台湾にやって来た「大正生命主義」
—張我軍の『至上最高道德—恋愛』と『文藝上の緒主義』
- (2) 台湾新文学運動最盛期に援用する黄得時の文学理論
—『「科学上の真」与「芸術上の真」』と『小説的人物描写』

おわりに

はじめに

台湾には過去2回の大陸・中国経由の大正文学の流入がある。

1回目は、日本植民地時期の1920-30年代において、北京に在住した張我軍(1902-1955)が中国の「文学革命」における言文一致とこれに連動する「五四文化運動」との精神的な連帯を保つため、広義の意味での中国新文学運動における文芸理論と創作の成果に影響を受けて、中国(北京)経由で大正文学を台湾新文学運動に流入させたケースである。

2回目は、戦後台湾に国民党政権とともに商務印書館などの出版業者と知識人が移動し定住したことが要因で、国民党再植民地時期の1960-70年代に見られた「現代主義」受容に関わり近代文芸論・文芸思潮・創作論を移植したケースである。この2つのケースにともに関わるのが厨川白村と彼の著作である。

台湾に大陸・中国から大正文学が2回流入したケースには、ともにならり複雑な台湾の内政事情が潜んでおり、「同化主義」と「漢民族主義」と

いう二項対立的な既成概念や、権力掌握者側の主張や特定の民族・族群の主張した事象にばかり捕らわれていると、台湾に中国経由の大正文学の流入があったことさえ気づかない。特に1920-30年代は台湾が日本統治下にあったという状況に照らせば、日本文学などは日本から直接に移殖されたと見るのが当然であろうし、それをわざわざ北京から遣って来たなどと主張するのは、単に奇を衒った見方をしているにすぎないと即断されかねない。

1920-30年代の台湾新文学運動は、欧州大戦後の「民族自決主義」の影響を受け、日本化が進展する中で失われていく漢民族としての文化アイデンティティを保ち、祖国との民族アイデンティティの連帯を願う台湾知識人の民族意識の表れとしての中国五四新文化運動の流れを汲む中国白話文運動の系譜に位置づけられる¹⁾。

この考え方は、1925年1月に『台湾民報』「協力して枯れ草の下のボロ殿堂を取り除こう」の中で、「台湾の文学は、中国文学の一支流である。本流において何らかの影響、変遷があれば、支流もそれに伴い自然に影響、変遷する。これは必然の道理である」²⁾と述べた張我軍の主張に代表されるように、台湾新文学運動と中国新文化運動の連帯が強調された。そしてこのような連帯が実行された論拠には、文化啓蒙の一環として大陸・中国の文学革命や五四文化運動の状況を台湾に直接導入するのに貢献した『台湾民報』の存在が挙げられる。『台湾民報』は、1923年4月東京で台湾雑誌社から創刊された中国白話文採用の新聞である。

本稿では、1920-30年代の台湾に大正期文学の顕著な特徴である「生命主義 (Vitalism)」の典型としての厨川白村著作が中国から渡って来て、台湾新文学運動の「抬頭期」(啓蒙実験期)に影響を与えた例を、張我軍と彼の著作が掲載された『台湾民報』に求め考察を試みる。そして、「抬頭期」での厨川受容がきっかけとなって展開された「最盛期」或は「自立上昇期」(聯合戦線期)と呼ばれる時期の受容の例を、黄得時と彼の著作が掲載された『先鋒部隊』及び『第一線』に求め考察を試みる。そこでまず、「大正生命主義」とは何か、何故厨川白村は時代の寵児から転落したのかの議論から始めよう。

一 厨川白村と「大正生命主義」

(1) 「大正生命主義」の典型としての厨川白村著作

日露戦争から関東大震災に至る1905年から1923年の間、大正期の知的青年たちには、「自己表現」「自我の解放」を標榜すると同時に、哲学や芸術一勿論中心となったのは西欧の哲学や芸術一などを広く教養として身につけることで、人格を高めることを目標とした潮流があったが、これを「大正教養主義」といった。

厨川白村(1880-1923)の著作は、デビュー作でベストセラーとなった『近代文学十講』が明治45(1912)年、その後のベストセラー群は、『文芸思潮論』が大正3(1914)年、『象牙の塔を出て』が大正9(1920)年、『近代の恋愛観』が大正11(1922)年、『十字街頭を往く』が大正12(1923)年、死後出版の『苦悶の象徴』が大正13(1924)年である。

厨川がベストセラーを陸続と世に送り、ほぼ大正の13年間を活躍した背景には、第一次世界大戦後の国際主義の流れを汲む大正デモクラシーと謂われた懐の広い時流に支えられた「大正教養主義」の風潮があったからであろう。まさしく、厨川著作は「大正教養主義」の寵児であった。

鈴木貞美は、大正期の教養主義のなかでも、「生命」の語が氾濫し、「生命」がスーパー・コンセプトになっていた現象があったことを「大正生命主義」と名づけその特徴を紹介しているが、纏めると次のようになる³⁾。

大正生命主義とはなにか

「生命主義(vitalism)」とは、思想一般において、「生命」という概念を世界観の根本原理とするもので、19世紀の実証主義に立つ目的論・機械論による自然征服観に対立する思想傾向をいう。

科学思想においては、「機械論」が、「生命」を無機物質に還元出来る、言い換えれば物理化学で解明出来る、とするのに対して、無機物質に還元出来ない「生氣」を、生命現象の根本に想定するものを「生命主義」と呼び、古来、この二つの説が対立・交替を続けてきた、とされている。

「生命主義」は、個人が内部にもつ自然力としての「生命」を自由に発現する思想であり、階級闘争などの種々の闘争を呼び起こしている。

大正期は、「自我」「自己」の語が氾濫し、個人の解放の思想が盛んであったが、その「自己」とは、概括すれば、近代市民社会の原理の一面である「利害

追求の自由」が、進化論の影響から「生存競争」の原理として把握され、それを超える個のあり方が模索されるときに「生命」が浮上したものといえよう。逆に言えば、競争する個を超える、普遍的概念としての「生命」が浮上していたのである。

「生命主義」という言葉は、田辺元『文化の概念』（『改造』大正11年3月号）の中では、Biologisumusの訳語であり、新カント派のドイツの哲学者リッケルトが、ベルグソン、ジェイムズ、デューイらの当代哲学の根柢にあると指摘した用語を借りている。Biologisumusは普通、「生物学主義」と訳し、人間が生物の一種であることを強調する思想傾向を指すが、ここでは、19世紀末から20世紀初頭の進化論や遺伝学の隆盛の影響を受けた哲学の意味である。

さて、「大正生命主義」の定義は田辺『文化の概念』に見いだすことができる。まず、田辺が「文化すなわち物質文明の発展、とする考え（＝自然の征服利用）を、〈生物はもとより、如何なる自然をも、同じく自然の一成員としての人間が自己の為に利用することを権利付ける根柢は到底発見せられない〉と批判する」ことを述べ、次のように整理する。

〈自然の一成員としての人間〉という観点に立ち、物質文明の進展を「文化」とする考え方を退けた上で、〈我々の物質生活に対する自然の利用といふ限られたものではなく、広く精神物質の両面に亘りて我々の生活内容を豊富にし、心身の活動を阻害するものから之を解放して、自由に其要求を満足せしむる内容の創造〉を「文化」と定義する思想を、「文化主義」（＝教養主義 culturism）と呼ぶ。これを、〈生命主義の立場における文化の意味〉とし、〈現代の思想を支配する基調としての生命の創造的活動を重んずる傾向〉を指摘する。

そこで、大正教養主義は、ひろく哲学や芸術を吸収した文化的人格を形成するという思想傾向にとどまるものではなく、その底に普遍的な「生命」の発現こそが文化創造の原基であるという思想をもっていたのである。

また、「大正生命主義」に大きな影を投げかけた、西欧19世紀末から20世紀初頭の思想として、(1)エルンスト・ヘッケルの優生学を伴う人種進化論学説、(2)アンリ・ベルクソンの『創造的進化』、(3)ウィリアム・ジェイムズの多元主義的プラグマティズム、(4)エレン・ケイのリベラルなフェミニズム思想、(5)ロシアの無政府主義者クロボトキンの『相互扶助論』の思想、の5つをあげる。

大正期の「生命」概念は、自我を人類や宇宙などの普遍性に開き、個の生存競争を超え、機械論的自然征服観を克服し、文化を創造し、社会を改造する思想の原理であった。総じて、近代の合理主義と功利主義を超克する原理であっ

た。

しかし、「生命主義」は関東大震災後に支配体制と反体制運動の両方から切斷される。震災後の国民精神統合の機運と西欧列強対アジアの意識が高まるに連れて、民族主義と西欧列強に対する汎アジア主義のうちに吸収される傾向が見える。その際、キイ・ワードとなるのは「民族の生命」という語であり、「民族の生命」をキイ・コンセプトとすれば、強力なナショナリズムともなりうるのである。(以上、下線はすべて筆者)

以上、長くなったが鈴木貞美が述べる「大正生命主義」の特徴である。

厨川白村のベストセラー群『近代文学十講』(1912.3)、『文芸思潮論』(1914.4)、『象牙の塔を出て』(1920.6)年、『近代の恋愛観』(1922.10)、『十字街頭を往く』(1923.12)年、『苦悶の象徴』(1924.2)には、上述した「生命主義」の原理が散りばめられている。

例えば、厨川白村の三大図書である『近代文学十講』にしても、『近代の恋愛観』にしても、『苦悶の象徴』にしても、そこに述べられるのは、自我を人類や宇宙などの普遍性に開き、個の生存競争を超え、機械論的自然征服観を克服し、文化を創造し、社会を改造する思想の原理である。特に、厨川の文学論(創作論と鑑賞論)である『苦悶の象徴』においては、「生命の力」「生の喜び」「生命力の発動」「生命の表現」「生命力の突進跳躍」「生命の行進曲」「生命の共感」などなど、「生命」「生命力」の言葉が氾濫している。

(2) 「個人」の創造的「生命力」を重視する「大正生命主義」の精神 —魯迅『狂人日記』(1918)と厨川白村の創作『狂犬』(1915)

張我軍は、台湾にこれから移植する新文学を「本流」の大陸文学の中の一環と見なして、「文学革命」でなされた実作を台湾に招き寄せた。その具体的に紹介した実作の一篇が「文学革命」の代表作でもある魯迅の『狂人日記』(『新青年』4巻5号、1918.5)であった。

台湾で魯迅『狂人日記』が初めて紹介されたのは、1925年5月21日と6月1日の『台湾民報』3巻15-16号であった。『狂人日記』は、『台湾民報』1925年4月21日の12号から6月1日の3巻16号まで5回に亘って連載された蔡孝乾(1908-1982)の「中国新文学概観」の解説と同時掲載であった。しかも、4回目と最終の5回目が「新小説」の解説で、蔡孝乾は「魯迅は

寂しく冷静な人で、彼の作品は完全に『写実主義』の色彩を帯びている。彼は客観的な態度で環境—自然界、人の世界を観察し、彼が見たり聞いたりしたものを、どんなに醜悪であろうと、どんなに卑劣であろうと、赤裸々に私たちに開け広げて見せてくれる。彼の知人でも、親戚でも、友人でも、彼自身でも、悉く彼の記憶する部分は、少しも遠慮なく、大変誠実にそれらを映し出したものは、すなわち彼の『呐喊』である」と紹介した次の頁が、『呐喊』第一作の『狂人日記』である。ここで、先に魯迅が敬愛して止まない厨川白村の唯一の小説『狂犬』を紹介しておく。

ここで、『狂人日記』とはどのような作品かを、筆者の読解で紹介しておく。

魯迅『狂人日記』(1918)

嚴復『天演論』(一八九八)が世に現れ、魯迅『狂人日記』(一九一八)が世に疑問を発するまで、「進化論」が中国知識人に与えた影響は、北岡正子と中井政喜の研究を基礎に、筆者自身の言葉と分析で簡略して紹介すると次のように整理されよう⁴⁾。

魯迅が『摩羅詩力説』の第二章でも「吾が中国の愛智の士は、独り西洋とは異なり、心が注がれる所は遼か遠い堯の唐、舜の虞の時代に在り、或いは逕ちに太古の時代に遡り、人と獣が雑居した時代に遊ぶのである。……(中略)……其の説は、人類進化の史実に照らせば、事実とは正に背馳するものである」と指摘するように、中国の伝統的尚古思想では伝説時代の唐の堯・虞の舜・夏の禹の三帝が開いた国家を理想として、そこから下って現在がどれだけ悪化しているかを考える。そしてこの尚古思想と逆なのがダーウィンの「生物学的進化論」から導き出され、スペンサーやハックスレーの「社会学的進化論」を援用して書かれた嚴復『天演論』であった。

嚴復『天演論』の出現に際し、当時の知識人は、「生存競争」に敗れ「自然淘汰」に遭い、「滅種亡国」という運命によって(漢)民族が滅び、中国は亡ぶ側に立っているとする共通の認識を抱いていた。一方、呉汝綸『天演論』「序文」に示された「人治(倫理過程)を日々新たにすれば、その後国家は永続し、幸いにも種族は滅ぶことはない、これを天と争いて勝つ」すなわち「争天而勝天」ということで〈勝天〉説と称し、このことは奮発努力すれば天に打ち勝つことができるとする希望を人々に与えていた。

ただここで注意しなければならないのは、〈勝天〉説に対して二段階の理解が存在している点である。

一段階は、清朝という異民族支配の政権のもと、世界資本主義市場の狩場として、中国は列強の侵略によって今「滅種亡国」という危機に瀕しているが、ここから脱するにはいわゆる「滅満興漢」という中国正統の漢民族の再興により国家を運営し（民族主義的理解）、「富国強兵」という経済力と軍事力を強めることで世界市場における競争の勝者になろう（国家主義的理解）、とする考え方である。

官僚思想家・嚴復としてはこの考え方に主眼があるのだろう。しかし、この考え方では、国家の統治者・支配者のもとで個人は民族・国家アイデンティティの無自覚の浸透により均一化されるか、逆に自己の尊厳と存在を民族・国家アイデンティティに越境させることで救済を求めるようなエピゴーネン的な知識人と烏合の衆だけの集合体の幼稚な国家になってしまう。

二段階は、中国が自然淘汰されることに警鐘を鳴らし、覚醒した優秀な「個性」に指導される精神革命によって、民衆を自立した〈人〉へと教化し、彼らによって中国と（漢）民族を再興させるという理解である。北岡正子は、国家存亡の鍵を握る〈民〉の教化は〈人〉の創出から始まり、〈人〉を〈天行〉（宇宙過程）の恣意に挑む者と捉え、〈人〉の教化のもとに〈民〉を位置づけ、教化を経ていない〈民〉は無知蒙昧の俗衆となってしまうので、社会改革、国家救亡の意志を固め能動的行動者としての〈人〉にならんことを期待する。これは、魯迅の「進化論」理解に昇華された精神革命を見据えた個の自立を求める〈立人〉の思想であり、〈天〉に闘いを挑む者こそ〈人〉なのだとする魯迅の〈人〉概念を形成する一つの前提をなすに至った、とする見解を示している。

魯迅は中国社会にこのような〈人〉の出現を望んだ。そして、「精神革命論」を主眼とした理想主義的であり、浪漫主義的な〈立人〉の思想は、魯迅の日本留学期（一九〇二―〇九）の文学活動の底流となっていた。しかし、魯迅がすでに『摩羅詩力説』で感じ取っていたように、民衆を先導するに値する才能を備え、未来を予兆する先知先覚（預言者）たる詩人たちはその才能ゆえに逆に民衆から孤立するのである。奇しくも、『哀塵』『月界旅行』（一九〇三）、『域外小説集』（一九〇九）などの翻訳、『人の歴史』（一九〇七）、『摩羅詩力説』（一九〇八）などの評論にしても、当時の日本留学

生を含む中国知識人たちの賛同の声も反対の声もまったく起こらず、魯迅は孤立し寂寞していた。また、一九一一年の辛亥革命で清朝政府を打倒し達成された中華民国では、袁世凱の皇帝僭称（一九一五）、張勳の復辟（一九一七）と理想とはほど遠い現実を呈していた。このことは、魯迅が内面的にも外面的にも体験した二重の挫折により文学活動が沈黙の状態に陥っていたことを意味していた。そして、魯迅のこの沈黙の十年を打ち破って世に現れたのが『狂人日記』であった。

『狂人日記』（『新青年』四巻五号、一九一八・五）は、文語体の短い「序文」と全十三節の長短にばらつきのある口語文の日記体一人称の「本文」で構成される。

「序文」には、“余”は中学校時代の友人の病氣見舞いに行くと、「被害妄想狂」の類の病を罹っていたのは友人弟で、今では病氣はすでに癒えて役人となって赴任しているが、わざわざ見舞いにくれた労をねぎらい病氣の症状の痕跡を留めた二冊の日記を友人から受け取る。この日記の気荒唐無稽な記述のなか、脈絡をなすものを一篇に記録して、医家の研究に供したものがこの「狂人日記」だとする設定である。

「本文」の十三節は主人公の“我”の内面の意識の展開により物語は進行する。第一節から第十節までは、この世界では天地開闢以来続いている〈食人〉（吃人）の歴史が公認されおり、彼ら食人者はお互いに食うか食われるかの関係にあり、いつも戦々恐々としている。“我”もいずれは食われる立場にいたので、〈本当の人〉（真的人）になって食人を止めるよう勧める内容で、“我”は食人社会とアイデンティティを共有できない意識であることが描かれる。ところが、第十一節に示される食人者である家長・“長兄”（大哥）が掌握する家で五歳の“妹”（妹子）の死んだことの回想を契機に“我”の意識の世界は急展開する。第十二節ではまず「四千年来いつも人を食ってきたところ」であることが意識される。ならばこそ、長兄が料理に混ぜた妹の肉を“我”も食べさせられていたかもしれず、“我”も知らなかったとはいえ食人というアイデンティティを共有していたことに気づくのである。そこで、最終十三節で〈食人〉というアイデンティティをもたない「子どもを救え」という虚しい叫びで結ばれるのである。

そこで、外枠の「序文」にあったように、〈狂〉は癒え〈役人〉として赴任しているのである。

後に魯迅自身が『狂人日記』を書いたのは「家族制度と礼教の弊害を暴

露することにあつた」(『中国新文学大系』「小説二集・導言」一九三五・七)と語っているように、家父長制度と儒教道徳に支配される社会を〈食人〉という比喩(実際には現実に起こっているという証例があつたにしても)を使って暴露、批判していることである。〈食人〉の世界とは「弱肉強食」「優勝劣敗」の世界とほぼ同義である考えられよう。しかし、十二節以降で告白されるように、中国の場合に〈食人〉の世界の構造が奥深いのは、多くの〈人〉それは知識人であつたとしても知らず知らずに〈食人〉というアイデンティティを共有し共犯者になってしまっていることに気づいていないことである。そこで、個の〈自立〉を確立した「〈本当の人〉にはお目に書かれない」(難見真的人)という現実が永続的に継承されるのだらうと推測できる。共犯者であることに気づくには集団のアイデンティティに支配されない〈狂〉と呼ばれるような異質で個性的な生命力が必要となる。しかし、多く〈人〉は権力体制に取り込まれた〈役人〉として、他人を食いながら自分は幸せに生きているのである。

ところで、『解見解字・巻十』によると、〈狂〉とは「獠犬也」とある。要するに、「狂とは、無闇に噛みつく犬」のことである。

厨川白村の創作『狂犬』(1915)

『狂犬』(東京・大日本図書株式会社、1915.12初版)には、創作「狂犬」の他、翻訳小説集7篇「老婆」(佛、モオパッサン作)、「女囚」(佛、トゥリエ作)、「猩々物語」(英、キプリング作)、「母親」(英、ウィダ作)、「復讐」(露、チエホフ作)、「夢なりしか」(佛、モオパッサン作)、「寂滅」(米、ポオ作)が収められる。

『狂犬』は「序」で照れと自嘲を籠めて紹介するように「わが妻に」奉げた全一二章からなる創作である。ただ、創作としては魯迅の『狂人日記』以上により稚拙な作品である。作品の冒頭部で「僕は狂犬だ。狂犬だか何だか実は自分では知らないんだ。が、人間といふ奴が勝手次第に、遠慮会釈もなう、僕の頭上にきちがひと云ふ名称を附加したのである」と語るように、狂犬に仮託された主人公が世間に咬みついた作品である。では、どのように咬みつき、どのように生きるかを次のように語る。

・人間のする事は皆此通り駄目だから、僕がここに新しい狂犬式の罵倒の模範を示してやつたのである。僕は人間がきちがひだと云ふ位だから、勿論愚物だ。愚物だから腹の底に力を籠めて真正面から罵り、吠えつき、喰い付く

のである。才気匠気はない代りに、愛すべき稚気呆気があるだろう。軽妙がなくとも熱意が潜むでるやう。四本の牙に満身の力を籠めて噛み付く。噛み付いて足りなければその儘左右に打ち振る。それでも足りなければ、今度は自分が斃れる迄だ。所謂、全我的だ、心熱式だ。下脛にうんと力を入れて、のべつ幕なしに、息も切れようと吠え立てたあとなどは、実に胸がせいせいして、もういつ死むでも好いやうな気がする。

・独往邁進、往かむと欲する所に往く、奮戦苦闘して唯だ一筋道に、一本調子に猪突する、若しそれで行けなければ、刀折れ矢尽きて潔く斃れるまでの話さ。この奮闘、この悪戦にこそ、生活の真味は在るのであろう。若し夫れ犬殺しの棒が頭上に舞ふとき、万事は休するのである。そこ迄は行く、行けるだけ行くんだ、天地がはじけても行くんだ。

そこで、『狂犬』には荒筋といえるようなストーリー性は無い。しかし、そこには思想と心情がある。整理すると次のようである。

人間は生物界の最高権威で、最大強者だと勝手にきめてるが、近代思想の瀰漫すると共に、僕等も少しは自我の尊厳を解し、個性の自由発展を志ざすに至り、今までのように人間に盲従せず、噛み付き、吠え立てるので、自分に都合が悪いから狂犬呼ばわりする。今のところまだ狂猫、狂羊、狂牛、狂馬、狂猿などという事を聞かない以上、自我の権威を重んじて人類に反抗的態度を執る聡明なる自覚者といえ、先ず犬の外にはないのであろう。狂犬は誰彼れの見さかぬも無く矢鱈に噛み付いたりしない。自分を愛し自分を尊重して呉れる者、唯一僕の主人に対しては、軽薄な人間の到底真似のできないような誠意を披瀝し、命を棄ててもよい。僕の親は矢張り犬だが、僕を大切に育てて呉れたのは親じゃない。親や孝行などという旧道徳に囚われるのは、犬にとっては無意味なことだ。主人は僕に獵犬の真似をさせたりはせず、一つの物を二つに分け一緒に味わい、互に個性を尊重し合い、両方の間には完全なる理解がある。「新しい女」じゃなくて「新しい犬」の共同生活だ。

中国語圏の知識人は厨川白村の心からの反抗精神に快哉を覚え、日本では始めは反抗的な物言いに興味を惹かれ魅力を感じながらも結局はあまりの罵倒性の凄まじさに嫌悪を感じてしまう。それは、「此頃になって漸く半獣主義などと利いた風な間の抜けた事を云はずと、もつと徹底的に、全

獸主義にでもなつて、僕等の後塵を拝しては如何」などというような、全身全霊で突進する動物的な「生命力」からくるのだろう。それが、反抗精神の表現とも、罵倒性の表現ともとれる。以下に示すのもそんな例である。

・人間といふ輩は実に意気地のない、女の腐つたやうな奴の寄り合ひで、気に喰はないことがあつたからと云つて忽ち相手の面前で短刀直入に怒鳴り付けけるやうな潔い事は決して為し得ない。先づかげへ廻つて外の奴に彼此と讒誣をする。中傷をする。さもなければ真綿で首をしめるやうないやみか皮肉をならべる。撲殺と云ふやうな堂々たる露骨なやりかたは成るべく避けて、毒殺とか、陷阱を設けるとか云ふ卑劣狡猾な慣用手段を用いやうとするのである。

・強い者は皮肉だのいやみだのお愛想だの愛嬌だのケチな事は云はない。堂々の陣を張つて正面から熱罵し痛罵し罵倒する。満身の力をこめて最も露骨に先づ敵を大喝し、三十棒を快喫せしめる。

このような考え方を持っているお犬様はさてどのような輩に咬み付き、吠え立てるのだろう。抜き出してみる。(……は中略)

・人間ぐるま生命を惜むいぎたない奴はありやしない。……なかには片脚を切られて、まだのこのこ生きてゐる白村などと云ふ奴もある。……いつまでぐずぐずと五尺の醜骸を天地の間に寄せて、無意味の生を貪ぼるやからは、神さまの恩寵を辱ふし得ない庸劣の徒であろう。……物欲にかられ、虚栄心に役せらる奴……長寿を貴ぶ俗習……百歳とやらまで死に損つた人間の老废物

→僕の長寿反対論……人間の俗物七八匹も遣付けさえすれば、僕はあしたに咬み付いて夕に死すとも可なりだ。

・虚偽と虚飾の結晶体とも云ふべき人間……人間界の虚偽や罪惡は、先づあのペコンとやるお辞儀と云ふ悪習から始まつてゐる。……日本人はまた此ペコンばかりでなしに、人の顔さへ見ると先づニヤニヤ笑ふ。……虚偽の笑……日本人には昔から感情を偽る事を以て、美德なりと心得る悪習慣がある。……相手に媚び対手を誤魔化さんがため可笑しくもないのに笑を粧ひ、自分の顔面を利用した猾手段である事が、あれでは犬の目にさへ忽ち観破される。

・人間と云ふ奴はとかくお互に他人の悪事を匿くし合ふ傾向がある。……人

の悪事をあばけば何時かには自分の事も外に洩れやう。

——不正である虚偽であると見れば、衆人稠座の前で猛烈な痛快な攻撃を加えてやればよい、陰口を利くなぞは男らしくない、此堂々たる態度をさへ執れば少しも恥づる所はない。

……囃犬式の熱烈なる攻撃を加へることは、真相を看破したる者の任務である。

・勝負事を道楽にする輩——名づけて生存競争などといふのは嘘の皮、産業をでも学問をでも、みな勝負事に見たいと云ふ野卑な争闘根性から出たことだ。

以下、同じ調子の文章が続くので、ここからは咬み付き、吠え立てる対象のみを記しておく。

読んで金儲けになったり、名を売る道具に使われる書物／俗吏生活の得意話／群衆心理で弥次的になり、挑発、煽動、広告である演説／日本の武士道とか儒教から生じる男子の美德／才子／手腕家・やりて／しっかりした人物／切れもの／怒らない奴・俗物／軽佻浮薄の悪風潮／子煩悩・子供をしからない親／相手の顔を直視しない奴／きちがひ水たる酒／衆愚が理屈をつけて名高くした場所・名所、等々

——いまの人間社会には剃刀のやうに切れる人間などは腐るほど居るから、更に要はない。それよりは才も何もない力と熱とのみのやうな、鉄槌のやうな、極めて単純なる愚物が必要なのだ。

以上、夏目漱石の長編小説『吾輩は猫である』(1905)を念頭に置きながら書いたとする厨川白村の唯一の創作『狂犬』である。本人も書いているように「小説」ではなく散文風の創作すなわち「エッセイ」である。「狂犬」の目を通して綴ったエッセイであり、痛快な批判・反抗精神に溢れた作品である。創作としてはあまりに稚拙だった故か、全集の編者附記によると、「『狂犬』は著者晩年の意志に副い全然省略した⁵⁾とする作品である。『魯迅日記』『魯迅蔵書目録』『周作人日記』などからは、厨川の『狂犬』の所蔵は確認できない。

しかし、ここでは立論の初めから『狂人日記』における『狂犬』の影響関係を指摘しようとしたのではない。ただ、『狂犬』では、国家や社会の

抱える矛盾や暗部を抉るには、何事にも「無闇に噛みつく犬」すなわち〈狂〉の精神が必要であり、自分の信じる者以外は何者にも媚びも諂いもしない精神、すなわち全身全霊で突進する動物的な全獣主義的な「生命力」をもってはじめて、閉塞する社会・体制の批判者と成り得ることを描いている。一方、『狂人日記』では、主人公の〈狂〉の精神が俄かに消えうせた理由に、自分も無意識に国家と社会にある矛盾や暗部と共生する共犯者や追従者となっていたことを自覚したことにより、逆説的に、閉塞する社会や権力体制を打開するには、自覚し、自立した「個人」の創造的な「生命力」が必要なことを描いていたといえるだろう。

魯迅は終生厨川白村に対する敬意と共感の念を懐いており、晩年の1933年11月2日の「陶亢徳宛」の手紙の中で、「日本では最近とりわけ厨川白村のような人物は見かけません」、「要するに、社会と文芸のよい批評家は見当たりません」と、10年前に死去した厨川を感慨を込めて思い起こしている。

(3) 昭和における「大正生命主義」の変容と厨川白村の退場

中国における厨川白村とその著作の意義は、少し大雑把に概括すると、西洋近代思想の紹介であれ、近代的恋愛論の紹介であれ、「天馬空かけるような大精神」とその批判精神を有する社会改造と国民性改造を示唆する書籍という意味が存在していたといえよう。

大正期においては、厨川白村の著作に色濃く漂う普遍主義的な「生命主義」の特性は、日本知識人には読み解くことができていない。しかし、魯迅のような一部の中国知識人には、「天馬空かけるような大精神」の持ち主として、厨川作品の特性が直感されていることは特筆に値する。

鈴木貞美が「大正期の『生命』概念は、自我を人類や宇宙などの普遍性に開き、個の生存競争を超え、機械論的自然征服観を克服し、文化を創造し、社会を改造する思想の原理であった。総じて、近代の合理主義と功利主義を超克する原理であった」⁶⁾と解くように、かなり理想主義的な原理であった。

大正の終焉と厨川白村の退場

彗星のように現れ13年間に大いに活躍した厨川白村であったが、忘れ去られるのもまた早かった。その理由は、例えば、大正期の主だった作家

や文学状況について語った『座談会 大正文学史』(柳田泉、勝本清一郎、猪野謙二編、岩波書店、1965.4)の「大正期の思想と文学」の中、「西洋文化の受容・市民意識の成熟—厨川白村のことなど」という対談に示唆される。対談を纏めるとこうである。

世界大戦後の大正日本には、真の一等国として世界を指導するという使命感のようなものがあった。また、日本文壇は軽蔑するが、世界のいい文学は受け容れるという傾向もあった。そんな時、厨川白村の「近代文学十講」のような世界の近代文学を系統づけて整理した読物は当時なかったので、時代の要求にぴったりと呼応して、ずいぶんと版を重ね、多くの学生に教養の書として、或いは卒業論文の参考書として大いに読まれた。ただ、同じ「文学論」「文学評論」でも夏目漱石はオリジナルな文化史的、文学論的であり、一方、厨川は概説的な要素が強いものの、象徴主義とか、世紀末思想とかの手ほどきをしてきていたので、学生には理解しやすかった。しかし、文学青年からは厨川は二番煎じで文学修業にはならないので、彼を読んでいたはだめだとか、文壇の事情通からは漱石「虞美人草」のモデルは厨川であり、浅薄なやつだとして、彼を読んでいるとばかにされた。ところが、ばかにされても面白いものだから彼の本は皆読んでいた。

ここで示したように、厨川白村と彼の著作は学生を中心に皆によく読まれていたにもかかわらず、「概説的」だとか「二番煎じ」だとか「文学修業にはならない」とかいう理由で、文学通の高級ぶったインテリからばかにされた。そこで、厨川の著作は日本でも何度も版を重ねるほどよく売れたのに、読者は読んでいることを隠して潜在的・潜在的に普及していたことになる。

このような状況に関して、英語学者でもある渡部昇一は「厨川白村の退場」と「忘却の淵」の理由⁷⁾の一つに日本における学問に対する質の変化を挙げる。

東京帝国大学英文科は、小泉八雲、夏目漱石、上田敏が去ったあと、明治30(1906)年に迎えたのはロレンス(John Lawrence, 1850-1916)であった。彼は、頭韻詩の研究でロンドン大学からD.Lit.(文学博士)を授けられたもので、学位論文 *Chapters on Alliterative Verse* (London, Henry Frowder: 1893, vi + 113pp.) はドイツの論文の形式に拠ったものであった。

ロレンスが1906年に東京帝大英文科に赴任すると、英語・英文学はドイツ風のフィロロギー（文献学）重視の学問へと変貌し、彼の流れを汲む弟子たち—英語学者の市河三喜、その後継者の中島文雄、英文学者の斎藤勇、戦後の福原麟林太郎および五帝国大学に存在した弟子—が英文学界を席捲し、文学ではなく文学学となり、ハーンや上田や厨川のような文学の系統は出番がなくなった。さらに、厨川の死後に京都帝大英文科の助教授・教授となった石田憲治は厨川の『近代の恋愛観』を「享乐的な分子」が強いと言って、新聞紙上で批判しているが、京都帝大からも厨川は忘却されたのである。

1923年9月1日に発生した関東大震災はすべての状況を大きく一変させる。

欧州戦争後に大きく成長した日本の資本主義は貧富の格差を助長させ、貧困に喘ぐ大衆は社会に対する不満を募らせていた。本来、木下尚江（1869-1937）のようにキリスト教の平等主義、博愛主義の立場から社会主義に進んだケースが多かった初期社会主義は人道主義的な傾向が強かった。しかしこのような社会状況のもと、山川菊栄（1890-1980）が厨川『象牙の塔を出て』を「殿様芸の大甘物」（1920）と評していたように、震災以降の社会主義者は政府からの弾圧により組織の先鋭化とセクト化のもと、本来味方に取り込むべき同伴者に対する許容性をますます欠如した組織になって行く。一方、関東大震災後には「不逞鮮人の暴徒化」などを取り締まるために「治安維持法」の前身となる「勅令第403号」が公布され、民衆はますます閉塞感を増し、社会はますます統制化が強められて行った。そこで、右でも左でも旗色の鮮明ではない、「殿様芸の大甘物」と評されるようなプチブル思潮を説いてベストセラーを生み出した厨川白村の著作は、時代から忘却される運命にあった。さらにまた、震災は厨川自身の肉体をも滅却させた。

鈴木貞美は、「生命主義」は、個人が内部にもつ自然力としての「生命」を自由に発現する思想であり、個人の解放と強調することによって階級闘争などの種々の闘争を呼び起こす要因も秘めていたことを指摘している⁸⁾。

さらに鈴木は、「生命主義」は関東大震災後に支配体制と反体制運動の両方から切断され、震災後の国民精神統合の機運と西欧列強対アジアの意識が高まるに連れて、民族主義と西欧列強に対する汎アジア主義のうちに

吸収される傾向が見える。その際、キイ・ワードとなるのは「民族の生命」という語であり、「民族の生命」をキイ・コンセプトとすれば、強力なナショナリズムともなりうるのである⁹⁾、とも指摘している。

二 台湾新文学運動と厨川白村

(1) 台湾新文学運動抬頭期到北京から台湾にやって来た「大正生命主義」——張我軍『至上最高道德—恋愛』と『文藝上の緒主義』

張我軍、原名清榮(1902-1955)は、台北県枋橋(現在、新北市板橋区)に生まれ、公学校卒業後、新高銀行に給仕、雇員として務め、1921年には新設の厦門支店の勤務となる。同年から漢文を学んだ厦門同文書院で、清の遺老秀才から「我軍」の名を授かり張我軍と改名する。その後、船で上海に渡り、1923年12月から1924年3月までの上海時期には上海台湾青年会に参加、さらに1924年3月から10月末までのおよそ8ヶ月を北京師範大学の教員・学生が経営する補習班で北京大学受験に備えた第1次北京生活を体験する。しかし、北京大学は受験せず、1924年10月下旬から1926年6月まで台湾に帰国する。その間、1925年1月から1926年6月まで『台湾民報』の編集を担当し、同6月に編集担当を辞職し、妻羅文淑(心郷)と共に北京に渡り、戦争終結により1946年の年明けに台湾帰国のため北京を離れるまでの20年余を本格的な第2回目の北京生活を体験している¹⁰⁾。

この第2次北京体験の当初、魯迅『日記』1926年8月11日には、「夜、……張我軍来る、『台湾民報』4冊贈らる」とある。しかし、魯迅は厦門大学からの教授招聘を受けて8月26日には北平を離れる。一方、1937年7月の北平陥落後の北京大学文學院の教授に就任した張我軍は、39年8月から北京大学文學院教授兼院長に就任した周作人と同僚関係にある。また、1942年11月、43年8月に東京で開かれた第1回と第2回の「大東亜文学者大会」には中国・華北代表として参加している。

ところで、張我軍は1回目北京生活時に創作した一連の新詩「沉寂」「対月狂歌」「無情的雨」を『台湾民報』に投稿する一方、新詩「前途」「我願」「秋風又起」「危難的前途」を創作し、これらの新詩と恋愛詩「乱都之恋」(1924.10.14)を収録する新詩集『乱都之恋』を刊行する時、「抒情詩集『乱都之恋』的序文」(『台湾民報』85号、1925.12.4)においては、「苦悶」と

いう言葉を使用することによって厨川白村『苦悶の象徴』への傾倒を明示していた。

そこで、張我軍が1924年3月から10月末までのおよそ8ヶ月の受験に備えた第1回目の北京体験により、すでに新聞、雑誌、単行本に多くの翻訳者によって中国語に訳された厨川白村の『近代文学十講』と『近代の恋愛観』を受容し、それを『台湾民報』を媒介に初めて台湾に伝えたことを、筆者は「北京からやって来た『大正生命主義』」と称した。

張我軍は『台湾民報』3巻7号(1925.3)の「新文学を研究するには何を読むべきか」で厨川白村『文芸思潮史』『近代文学十講』『苦悶の象徴』の3冊を必読書として推薦していたが、第75号(1925.10)には『至上最高道徳—恋愛』を、第77、78、81、83、87、89号(1925.11—1926.1)の6回に亘った連載では『文芸上の緒主義』を書いて、厨川『近代の恋愛観』(1922.10)と『近代文学十講』(1912.3)、『文芸思潮史』(1914.4)の3冊を自分なりに咀嚼し吸収した解釈で紹介している。

『至上最高道徳—恋愛』と厨川白村『近代の恋愛観』

張我軍の『至上最高道徳—恋愛』の底本としては、日本語版『近代の恋愛観』(1922.10)、中国語版Y. D. 訳『近代的恋愛観』及び『恋愛と自由』(『婦女雑誌』8巻2号、1922.2/9巻2号、1923.2)と任白涛輯訳『恋愛論』(上海学術研究会叢書部、学術研究会叢書之6、1923.7)の三種が考えられる。しかし、翻訳用語が中国語版とは一致しないので、恐らく張我軍は増版を重ねた原本『近代の恋愛観』を底本としていた、と筆者は考える。

『至上最高道徳—恋愛』は「序文」「一、恋愛の発生」「二、恋愛観の変遷」「三、両性間的恋愛は発源於性欲」「四、恋愛的神聖」という構成で、「序文」でこの理論は決して自分のものではなく、「厨川白村先生の名著『近代の恋愛観』を編訳したものである」と語る。

ところで、「生命主義」が「人が内部にもつ自然力としての『生命』を自由に発現する思想であり、個人の解放と強調することによって階級闘争などの種々の闘争を呼び起こす要因も秘めていた」と鈴木貞美が指摘していたが、『近代の恋愛観』の中で、特に厨川的な理論と発想で、西洋近代主義的な思考法を乗り越える所謂「近代の超克」的思想の一つのアイデアとして、「恋愛と自我解放」に述べられる次の一文がある。

現代の最も進んだ考へ方から言ふと、恋愛の心境は即ち『自己放棄に於ける自己主張』self-assertion in self-surrender だと見られてゐる。おのれの愛する者のためにおのれの全部を捧げることは、つまり最も強く自己を主張し肯定してゐるのである。恋人のうちに自己を発見し、自己のうちに恋人を見出したのだ。この自我と非我とのびつたり一致するところに、同心一体と云ふ人格結合の意義がある。それは即ち一方から言へば、自我の拡大であり解放である。此境地に到つてはじめて真の自由は得られる。小我を離れて大我に目ざめるからだ。

Y. D. (呉覚農) 訳『近代的恋愛観』でも、及び輯訳版の任白涛『恋愛論』でもこの部分はほぼ直訳体で翻訳している。ところが、1926年改訳本の上海啓知書局版『恋愛論』では、任白涛は「自己放棄」すなわち「自己犠牲」における「自己主張」を前近代的な恋愛観であり、厨川は個人の解放を強調し「自己犠牲」を排除したエレン・ケイが理解できていないとして、この部分が削除される。

しかし、張我軍は「四、恋愛的神聖」で「自己放棄に於ける自己主張」を自分の言葉で次のように解釈する。

これまで学校の先生から忠や、孝や、社会奉仕や……などと様々な形式で説教されたが、依然として「自己犠牲」ということを十分に体験することはできなかったが、切実に体感できるのは、「恋愛」を知ったときからであった。すべての道德の根底に横たわる自己犠牲というものは、多くは燃えるが如き恋愛をしている男女の最も痛烈な体験からきている。何が「人の道」で、口を開けば仁義、論議すれば忠孝を言うだけだが、夢にさえも見たことのない熱烈な自己犠牲の最高の道德性は、ただ恋愛の中で最も美しく出現するのである。そこで、このような恋愛は、ただ色を好み性欲を満足させるだけのような者は言うまでもなく、或いは自己の財産を譲るためには継承する子孫が必要だとする不良老人の輩や、或いは青年時代の旺盛の性欲を満足させるために、女学生や女工を追いかけ誘惑する不良若者の輩には、夢にさえ見ることのできない心境である。恋愛にはある種の高貴さがあり、心から純粋な人にして成し遂げることができるとのである。逆に言えば、人の心は、恋愛を知るに至って、はじめて浄化され、向上されるのである。このような論は決して言い過ぎた言い方ではない。

ここに示した張我軍の理解力と考え方は同時代の中国知識人よりはかなり深いといえる。全訳版の『近代的恋愛観』（上海開明書店、1928.9）の訳者夏丏尊はかなり良識的な知識人である。彼は「訳者序言」で「一方で性欲をのみ喋々し、他方で恋愛を劣情なり遊戯なりと見做すという、この二つの言葉はこの部分に関する中国の現状を診断するもので」、「厨川氏のこの本を紹介することは、同病の者に同じ薬を与えることになると言えるかもしれない。少なくとも好い調剤ではあろう」とするかなり功利的な理解であった。それに較べ、張我軍は、「夢にさえも見たことのない熱烈な自己犠牲の最高の道徳性は、ただ恋愛の中で最も美しく出現するのである」、「恋愛にはある種の高貴さがあり、心から純粋な人にして成し遂げることができるものである。逆に言えば、人の心は、恋愛を知るに至って、はじめて浄化され、向上されるのである」として、「恋愛」によって「浄化」され、「最高の道徳」となった「自己犠牲」を発見している。台湾人である張我軍によって、厨川白村が主張した競争する個を超える、新しい普遍性を表わす概念としての「生命主義」の発想が発見されているのである。

『文芸上の緒主義』と厨川白村『近代文学十講』

台湾では、陳曉南『西洋近代文芸思潮』（新潮文庫128、文学評論及介紹、台北市・志文出版社、1975年12月初版）という翻訳書が存在する。実はこの本は厨川白村『近代文学十講』の完訳版で、『西洋近代文芸思潮』と改題し翻訳したものである。

厨川は『近代文学十講』の中で、「文学は常に時代の反映である。そして何れの時代にも、其文化の中心となり根底となっている思想がある。その時代のあらゆる活動の心棒ツァイトガイストとなって、時勢を運転させている根本的精神である。世にいう時代精神の語は即ち之を指したもので、文学の背後には必ず此時代精神が横たっている事は今更いう迄もない」の述べ、「一代の民心」を反映する「一代の情緒」が作品となって表れたものが文学であるとする観点を示す。そして「文芸思潮」とは、前代の時代精神を反映したものへの反逆として、次の時代の文学・文芸が表れることを指している。

陳曉南はこの厨川『近代文学十講』出版から63年以上を経過した1975年に、厨川のこの本は「西洋近代」の「文芸思潮」という観点から書かれていることを明確に意識し、『西洋近代文芸思潮』と改題した訳である。

張我軍が『台湾民報』に1925年11月から26年1月の6回に亘って連載

した『文芸上の緒主義』は、厨川『近代文学十講』を基本的な参考書にしなが、最近200年間の欧州文芸思潮変遷の痕跡を調べると、およそ4つの時期に区分できる」として、「欧州文芸思潮」という観点から書かれた最新の文芸・文学紹介の理論書であったことが解る。

張我軍が、区分した4つの時期とは次の通りである。

- (1)18世紀の文芸復興以降、欧州文芸界が形式と理智を重視し、情緒を軽んじていたのは、古典主義（Classicism 或は擬古主義と訳される）の時代と称される。
- (2)19世紀前半は主観の文芸思想が勃興し、浪漫主義（Romanticism 或は伝奇主義と訳される）がすべてを凌いでいた。
- (3)19世紀中葉すなわち近代（中国では歴史における「近代」は1840年のアヘン戦争から一筆者）に至ると、現実主義（Realism）、自然主義（Naturalism）全盛の時代になってしまう。
- (4)19世紀末からは、新主観主義すなわち新浪漫主義（New Romanticism）の時代へと変わってしまう。

張我軍はこの4つの時期区分の中から、「浪漫主義（Romanticism）」と「自然主義」を中心に論を展開し、「以下に厨川白村氏の話の一節を引用して浪漫主義の大意を説明する」と明記する。さらに、浪漫主義の最後の締め括りの解説で、「浪漫主義は本来古典主義に対する反動と破壊に起こった芸術であり、昔日の文芸を破壊し新しいものを建設したのであり、後の自然派のために礎を立て源を開いたのであった。すなわち、浪漫主義の一面には、すべての近代文学の基礎的な性質を備えていることには、注意を払わねばならない。この浪漫主義が極まった時、自然と反動の潮流となり、出現したのが現実主義、写実主義の文学であった」と、張我軍は厨川のいう「文芸思潮」の考え方を受け、厨川の表現手法で解説している。

(2) 台湾新文学運動最盛期に援用する黄得時の文学理論

— 『「科学上の真」与「芸術上の真」』と『小説の人物描写』

黄得時（1909-1999）は、30年代の台湾新文学運動最盛期においても、40年代台湾皇民化文学運動期においても活躍した人物である。現在彼が高く評価されるのは、皇民化文学運動期に「台湾文壇建設論」の中で書い

た「地方文化の確立」と「台湾独自の文壇」の発展を目指すという姿勢が『台湾文学』という雑誌の方向性を代表するものと解釈されるようになってからである¹¹⁾、と指摘する。

黄得時『台湾文壇建設論』（『台湾文学』1巻2号、1941.9）という日本語論文は、台湾の文学界は、「芸術至上主義」をもって「エキゾチズム」を描き「中央文壇に進出せん」ことを目指した人と、「台湾全般の文化の向上発展を計らう」とした人とに分れ、後者の「台湾独自の文壇を建設して行かう」とする人々には「絶大な敬意を表する」と述べ、前者の「中央文壇」を目指した作家が西川満（1908-1999）だと暗示し、西川批判の論文として引用される。また、黄得時の『輓近の台湾文学運動史』（『台湾文学』2巻4号冬季号、1942.10）という日本語論文は、台湾皇民化期の文学を論じる場合、台湾人作家と日本人作家を対比して、在台日本人作家を主とする『文芸台湾』を批判し、台湾人作家を主とする文芸集団『台湾文学』を肯定的に論じる際に引用される。

いずれも、1970年代中国民族主義的集団経験叙事モデルを代弁する際の典型的な論文モデルとなる。

ところが、昭和10（1935）年前後、楊逵、呂赫若、張文環、龍瑛宗（1911-1999）等台湾の文学界で活躍しつつあった台湾人作家たちは、「内地」の文学賞に当選して中央文壇に進出して、「内地」文壇及び台湾の文芸界でも注目された。呂赫若の作品を除いた三作品は、出版社が募集した懸賞小説への応募作品であり、「中央文壇に進出せんがため、台湾を踏台としたのは、西川満ではなく一時的にあるにせよ積極的に懸賞小説に応募したのは台湾人作家の方である。しかし、黄得時はこのことには全く触れずに、『台湾文壇建設論』の中で、彼らを「中央文壇を全然考慮に入れず、専ら台湾で独自の文壇を建設してその中で作家が作品を発表して自ら楽しむと同時に、台湾全般の文化の向上発展を計らう」とする作家と評したのであった。黄得時は「中央文壇」志向が専業作家志向であることは当然理解していただろうが、できなかつたといえる。西川満よりもむしろ黄得時の方が「中央文壇」との接続を訴えていたが、そのことにも触れていない。彼はその後も常に台湾の中央を生き抜いてきた知識人であったと指摘する論文も存する¹²⁾。

兎に角、黄得時は時代を生き抜き時流を察知する鋭い慧眼の持ち主であったといえよう。

『「科学上の真」与「芸術上の真」』と厨川白村『象牙の塔を出て』『苦悶の象徴』

最近、黄得時における厨川白村受容の様相を指摘する論文¹³⁾が登場した。

嶋田聡によれば、黄得時『「科学上の真」与「芸術上の真」』には、厨川白村の著作『芸術の表現』（所収『象牙の塔を出て』）に述べられる表現手法を下敷きに援用しながら、結果的には厨川が『苦悶の象徴』で語った「絶対の自由」に連なる芸術至上主義の精神が色濃く影響された理論になり、「社会のための芸術」を主張するテキストを使用しながら「芸術のための芸術」を主張する理論展開になっている、と指摘している。

嶋田の論を補いながらすこし詳しく見てみよう。

1930年代に隆盛する台湾新文学運動の中、1933年10月に結成された「台湾文芸協会」の機関誌『先発部隊』（第1号、1934.7）は「臺灣新文學出路的探究」を創刊号特集に組んでいるが、その中、黄得時『「科学上の真」与「芸術上の真」』という漢語白話小品文は、厨川白村の著作『芸術の表現』（所収『象牙の塔を出て』）をコピーし援用した内容であることを「写真に写すところの真」と「白髪三千丈の真」などの表現手法から、嶋田は探り当てる。一方、厨川の『芸術の表現』が芸術至上主義の象徴たる「象牙の塔」から出て「作者の生命」「生命力」すなわち「個性」を縛る社会に対する批判と批評を試みたのは、厨川が『苦悶の象徴』で「文芸は生命力が絶対の自由を以て表現せられた唯一の場合だ」として「生命力」すなわち「個性」の「絶対の自由」を重視したのに対して、黄得時は「創作力と個性は、芸術家の唯一の生命である」と語るように、文学論としてはごく啓蒙的な一般化を施すので、彼の理論には社会批判・批評的な観点は一切存在しない。逆に、『苦悶の象徴』に語る夢に現れるような絶対自由の境地を現実世界に夢想する黄得時は「読者を芸術の殿堂の中に陶醉させ」たいと願うのである。

嶋田は、さらに『先発部隊』巻末の「掲示板」に掲げられた「文芸は断じて俗衆の玩弄物ではなく、厳粛にしてまた沈痛なるべき人間苦の象徴である」（文藝不是俗衆の玩弄物、而是嚴肅的、沉痛的人間苦的象徴）という文章をはじめ、無記名の『宣言』、芥舟（郭秋生）『卷頭言・台湾新文学出路的探究』などにも『苦悶の象徴』の影を見出すが、雑誌の寄稿者全員に共有されているものではないとも指摘している。

『先発部隊』は、「純文芸雑誌」を表題に、漢語白話を横書きの形式で編

集していたという点ではかなり革新的であった。そして、この雑誌に掲載された文学論としての黄得時『『科学上の真』與『藝術上の真』』は、1頁36字、30行の紙面で1頁半、高々1,400字にも満たない短編であり、嶋田が言う所の「文学論の表現モデル」を厨川白村の文章に求めたのは、厨川が言う所の共鳴共感の鑑賞論に起因されての執筆ということになるだろう。

ところで、黄得時が「白髪三千丈」という「表現としての真」が「芸術上の真」だとする厨川著『芸術の表現』の文章の引用は、拙著『中国語圏における厨川白村現象—隆盛・衰退・回帰と継続』の第6章「ある中学校教師の『文学概論』—本間久雄『新文学概論』と厨川白村『苦悶の象徴』『象牙の塔を出て』の普及」で述べた「文学的真実」の引用と同じ箇所である。これは、民国文壇では無名の一中学校教師の王耘莊が、本間久雄『新文学概論』（章錫琛訳『新文学概論』上海商務印書館、1925.8）を章構成の骨格とし、厨川白村『苦悶の象徴』（魯迅訳『苦悶的象徴』未名社、1924.12）と『象牙の塔を出て』（魯迅訳『出了象牙之塔』未名社、1925.12）を文学論の雛形に編んだ『文学概論』（杭州非社出版部、1929.9）での受容例である。王耘莊は日本語ができないので当然使用したのは、魯迅訳『苦悶の象徴』と『出了象牙之塔』の中国語版であった。

一方、黄得時『『科学上の真』与『藝術上の真』』の脱稿が1934年4月3日とあるので魯迅訳・中国語版『苦悶の象徴』や『出了象牙之塔』も参考した可能性は否定できない。なぜなら、黄得時のこの論考は、間テキストを自分なりに咀嚼、消化して表現しているので、必ずしも魯迅の翻訳文体や翻訳用語を同様に踏襲しているとは限らない。例えば、典型的な用語を①厨川の日本語、②魯迅の訳語、③黄得時の訳語から拾って比較してみると次のようになる。

- ① a 科学的の真、b 科学的真、c 科学上の真、d 芸術上の真、e 表現としての真、f 写真、g 絵
- ② a 科学底的真、b 科学底真、c 科学上の真、d 芸術上の真、e 作為表現的、f 照相、g 絵画
- ③ a なし、b なし、c 科学上の真、d 芸術上の真、e 不失為表現真、f 写真、g 絵図

これだけでは、黄得時が底本にしていたのは、厨川原典か、魯迅翻訳版か、はたまた両方かは判断できない。

『小説的人物描写』と厨川白村『苦悶の象徴』及び二冊の中国語版小説

『第一線』(第2号、『先鋒部隊』は『第一線』と改題、台湾文芸協会出版部、1935.1)に掲載された黄得時『小説的人物描写』にも、厨川白村『苦悶の象徴』の文学論が色濃く反映され、特に『鑑賞論』の『文芸鑑賞の四段階』などを参考に、[1] 外面描写、[2] 内面描写という構成で、[1] では「人物」「事件」「背景」を、[2] では「情緒」「思想」「性格」をキーワードに、「我々は人物描写の立場から、台湾の今の文壇の小説状態を見てみよう」、すると「台湾で発表されたすべての作品は、大方が『事件』が中心である」、そこで「今後多くの作家に望むのは、人物描写の面で、出きるだけ時間をかけて研究し、我々の台湾芸術の殿堂を完成させようではありませんか」と締めくくっている。

ところで、ここで参考とすべき人物描写の表現モデルの小説に選ばれた作品がトルストイ、耿濟之訳『復活』の中国語版であり、アルツイバーシェフ、魯迅訳『労働者シェヴィリョフ』(上海商務印書館、1922.5)の中国語版であり、魯迅『阿Q正伝』の中国語版であったことは注目に値する。魯迅『阿Q』は『台湾民報』(81-85号、87-88号、91号、1925.11-1926.2)に全8回に亘って連載されていたが、耿濟之訳『復活』と魯迅訳『労働者シェヴィリョフ』は大陸・中国から入手したものである。すると、30年代台湾における中文図書の入手状況の困難さから考えれば、当然黄得時が使用したのは厨川の日本語原典であろうと想像するが、魯迅訳『苦悶の象徴』と『出了象牙之塔』はともに入手されていた可能性がないとは言えない。

そして、黄得時も、王耘荘もそれぞれ「近代とはなにか」という問題を「文学とはなにか」というところから論を組み立てている。厨川は『文芸の根本問題に関する考察』(所収『苦悶の象徴』)で「文芸は生命力が絶対の自由を以て表現せられた唯一の場合だ」として、「芸術の表現」(所収『象牙の塔を出て』)で「作家の有つて居る生命の内容即ち生命力といふものが描かれた物に乗移つて居なければ芸術的表現にはならないのです」と語るように芸術の表現における「生命力」を重視したように、黄得時も「創作力と個性は、芸術家の唯一の生命(性命)である。創造力と個性が濾過された経験をもつ作品は、“活きている”と言え、創造力と個性が蒸留された経験を持たない作品は“死んでいる”のだ」として、やはり「個性」が芸術的表現の「生命」だと考えている。中国青年である王耘荘にしても、

台湾青年である黄得時にしても、厨川白村著作から読み取ったのは、個の生命力の表現手法としての純粋な「文学論」であって、ベルグソンの「生命の衝動」が背景にあることにも、「民族生命」や「民族国家」の形式化や実現像に具体的なイメージを与えているなどとは思いませんでした。

おわりに

本稿との関わりから、筆者の言葉で「大正生命主義」をもう一度簡明に整理しておく。

大正期の「生命主義 (vitalism)」とは、無機物質に還元出来ない「生氣」すなわち「生命力」(vitality)を生命現象の根本とし、機械論、進化論、合理主義、功利主義により出現した自然征服観や物質文明の進展を「文化」とする考え方に対峙する思想傾向であり、心身活動を阻害するものから解放する「個人」の創造的な「生命力」により、文化を創造し、社会を改造するための思想原理である。ただ注意を要するのは、「生命主義」が「民族」や「集団」の「生命力」を基本概念とすれば、強力なナショナリズムともなり得た。その結果、「大正生命主義」は関東大震災後に支配体制と反体制運動の両方から切断され、震災後の国民精神統合の機運が高まるに連れ、欧米列強のアジア侵略に対抗するため、アジア諸民族が日本を盟主に団結すべきとする大アジア主義 (Pan-Asianism) のうちに吸収されてしまう。

以上の「大正生命主義」という概念規定と歴史的な動向を視座に、1920-30年代の台湾新文学運動における厨川白村と彼の著作の果たした役割と意義の考察を通し、以下の結論を導き出すことができた。

第一に、張我軍が台湾に中国の「文学革命」の実作として紹介した魯迅『狂人日記』には、権力者や体制側の共犯者や追従者であることに気づくには集団のアイデンティティに支配されない〈狂〉と呼ばれるような異質で個性的な「生命力」が必要となること、また、厨川白村『狂犬』では、国家や社会の抱える矛盾や暗部を抉るには、何事にも「無闇に噛みつく犬」すなわち〈狂〉の精神、動物的な全獣主義的な「生命力」が必要なことを述べた。この二つの独創的な「生命力」は、奇しくも「生命主義」でいう「個人」の創造的な「生命力」により社会を改造するための思想原理と一致していたのである。

第二に、厨川白村の文学論としての『苦悶の象徴』には、「生命の力」「生の喜び」「生命力の発動」「生命の表現」「生命力の突進跳躍」「生命の行進曲」「生命の共感」などなど、「生命」「生命力」の言葉が氾濫し、競争する個を超えて、近代合理主義や功利主義という西欧普遍主義の概念をも超克する「生命主義」の理念が躍動していた。この近代の超克思想としての意義があった「大正生命主義」とその思想が体现された厨川白村著作、さらには右でも左でも旗色の鮮明ではない厨川白村自身も、関東大震災後に権威主義的な学問の体系化に身をおいた体制側の人たちと、国家・政府から弾圧され先鋭化、セクト化した反体制側の人たちの両方から切断され、時代から忘却される運命を辿ってしまった。

第三に、1920年代の台湾新文学運動の抬頭期（啓蒙実験期）における張我軍の厨川白村受容は大陸・中国の知識人と較べてもかなり理解度の高さを示していた。張我軍の厨川『近代の恋愛観』の解釈書として書かれた『至上最高道徳一恋愛』には、厨川の「自己放棄に於ける自己主張」(self-assertion in self-surrender) の考え方を肯定し、「熱烈な自己犠牲の最高の道徳性は」「恋愛」によって「浄化」されることによって成し遂げられると紹介されている。張我軍がエレン・ケイなどが主張した自己解放や自由恋愛などの西欧普遍主義の観念には従わず、競争する個を超える、新しい普遍性を表わす精神としての「自己放棄に於ける自己主張」の発想を発見していたことは、注目に値する事実であった。さらに、張我軍『文芸上の緒主義』には、厨川『近代文学十講』を基本的な参考書にしながら、「欧州文芸思潮」という観点から書かれた最新の文芸・文学紹介の理論書であったことが判明した。

第四に、1930年代の台湾新文学運動の自立上昇期（聯合戦線期）或いは新文学運動最盛期と呼ばれるこの時期にも厨川白村受容の痕跡を黄得時の2つに見て取ることができた。1つは『「科学上の真」与「芸術上の真」』で、もう1つは『小説的人物描写』で、前者は純粹に芸術的表現とはどのようなものを語り、後者は人物描写、心理描写はどのように描くかを説明する、2作品ともに、純粹な文学論と創作論の観点からの『象牙の塔を出て』と『苦悶の象徴』の援用であることが判明した。しかし、ここで受容された厨川白村は単なる文学理論の切り取りのためであり、「大正生命主義」という西欧普遍主義をも超克する国際主義的な要素は消失していた。

河原功は日本植民地期の台湾文学を「台湾新文学運動期」（1922-37）と「戦時下の台湾文学」（1937-45）と2つの時期に区分し、さらに「台湾新文学運動期」について前期（1922-1931）を「台湾新文学運動の抬頭期」として、中国白話文が台湾に定着しプロレタリア文学が勃興するまでの時期、後期（1931-1937）を「台湾新文学運動の自立上昇期」として、社会運動が壊滅的な打撃を受けたことで、新文学運動に活路を求めて、抵抗という理念を共有した全島的な文芸団体が成立された運動最盛期であり、プロレタリア文学運動の渦中から、中国白話文に対決する台湾話文運動がおこり、郷土文学論争が引き起こされ、37年の日中全面戦争により、新聞の「漢文欄」が廃止されるまでの時期であるとした¹⁴⁾。

一方、陳芳明は「文学史一揃いを作り出そうとすると、往々に史観の問題に影響が及んでしまう。所謂史観とは、歴史叙述者の見識と解釈であり、如何なる歴史解釈も歴史家に具わる政治的色彩を免れ得ない。歴史家が社会をどのように見做し、そのことでその社会に出現した文学にどのような評価を下すかは、共にそのイデオロギーと密接な関係がある」¹⁵⁾と明確に意識した上で、彼の歴史認識に従った専門用語と時期区分に従い、日本植民地期の台湾文学を「啓蒙実験期」（1921-31）、「聯合戦線期」（1931-37）、「皇民運動期」（1937-45）の3つの時期に区分している。

陳芳明のいう通り叙述者のイデオロギーにより使用した専門用語は、川原と陳芳明とでは、「台湾新文学運動の抬頭期」が「啓蒙実験期」、「台湾新文学運動の自立上昇期」が「聯合戦線期」という呼称の違いとはなっているものの、しかし、時期区分の説明や解釈は同じ内容が述べられているので、本稿では従来の河原功の呼称を使用した。

本稿は、2012年8月4-5日に愛知大学東亜同文書院大学記念センターと台湾・中央研究院台湾史研究所の共催により、愛知大学名古屋校舎で行われた国際シンポジウム「近代台湾の経済社会変遷—日本とのかかわりをめぐって—」で発表した報告を論文「台湾新文学運動と厨川白村—西欧普遍主義の概念を超越する「大正生命主義」を視座に」『近代台湾の経済社会変遷—日本とのかかわりをめぐって』（東方書店、2013.11、217-248頁）を軸に、新しい資料を使用し40%を加筆し、さらに削除、修正を加えたものである。

注

- 1) 河原功『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』研文出版、研文選書72、1997.11、123-246頁
- 2) 張我軍「請合力拆下這座敗草穢中的破旧殿堂」『台湾民報』3卷1号、1925.1
- 3) 鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995.3、2-15頁
- 4) 魯迅の「進化論」については、論を組み立てる際に以下の論文を参考にした。
 - ・北岡正子「敵復『天演論』—魯迅「〈人〉概念のひとつの前提」／「〈狂人〉」となった詩人—『狂人日記』の〈私〉像」『魯迅救亡の夢の行方—悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』関西大学出版部、二〇〇六・三
 - ・中井政喜「魯迅の「進化論から階級論へ」についての覚え書(上)(下)」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』四二号、四三号、二〇一二・二、八
- 5) 『厨川白村全集』第五卷、改造社、1929.4、288頁
- 6) 鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」11頁
- 7) 渡辺昇一「書物ある人生²¹徳富蘇峰」『WiLL』ワック出版、2013.6、294-301頁
- 8) 鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」4頁
- 9) 鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」13-14頁
- 10) 許俊雅編選『張我軍』国立台湾文学館出版、台湾現当代作家研究資料彙編16、2012.3
- 11) 柳書琴「戦争と文壇—盧溝橋事件後の台湾文学活動の復興」下村作次郎他編『よみがえる台湾文学』東方書店、1995.10
- 12) 以下の二つの論考に典型される。
 - ・中島利郎「日本統治期台湾文学研究 西川満論」『岐阜聖徳学園大学紀要』外国語学部編46号、2007.2、59-64頁／中島利郎「西川満と日本統治期台湾文学—西川満の文学観」下村作次郎他編『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』東方書店、1995.10
 - ・和泉司「西川満と黄得時—四〇年代〈台湾文壇〉を考えるために」『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉—〈文学懸賞〉がつくる〈日本語文学〉』ひつじ研究叢書(文学編)5、ひつじ書房、2012.2
- 13) 嶋田聡「文学論の表現モデルとしての厨川白村—黄得時『科学上の真』与『芸術上の真』」と雑誌『先発部隊』の発刊動機についての一考察『野草』90号、2012.8
- 14) 河原功『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』129-131頁
- 15) 陳芳明『台湾新文学史』上・下、台北・聯経出版、2011.10、24-33頁